

Alinity hq の基礎的検討

◎堀下 真季¹⁾、竹下 和美¹⁾、竹下 望¹⁾、高以来 千春¹⁾、前田 美保子¹⁾、牟田 正一¹⁾
独立行政法人 国立病院機構 九州がんセンター¹⁾

【緒言】今回 Abbott 社 Alinity hq (hq) について検討する機会を得たのでその基本性能評価と、当院で使用している sysmex 社 XE-5000 (XE) との比較検討を行った。

【検討内容】検体は患者検体 (EDTA-2K 加血) の残余を使用。

- ①同時再現性：Alinity h29P コントロール 3 濃度と患者 1 検体を CBC, DIFF, 網状赤血球 (RET) を 10 回測定。
②低値検体の信頼性：WBC/PLT 低値検体 (3 検体) を各 5 回, 10 回測定。③微量検体測定の信頼性:オープンモードとクローズモードで 30 検体測定。④XE との比較検討:CBC (257 検体), DIFF, RET (110 検体) 測定。
⑤目視法の相関：hq, XE で測定した DIFF と骨髓認定技師 2 名の 200 カウント分類 (80 検体) の相関 ⑥症例検討：ATL, MF, AML. スライド上で報告する。

【結果】①CV は CBC 0.1-2.6%, DIFF は NEUT:1.2-1.9%, LYM:1.0-3.6%, MONO:3.4-6.2%, EOS:5.1-13.4%, BASO:9.3-23.1%, RET:1.6-5.0%であった。

②CV は, WBC : 2.2-5.9%, PLT:1.6-2.7%と良好であった。

③CBC, DIFF および RET の相関係数 (r) は MCHC と BASO を除いて 0.966-0.999 と良好であった。④XE との相関は, MCHC と BASO を除いて $r=0.942-0.998$ と良好であった。MCHC と BASO は, 項目自体の変動幅が狭いためバラツキが大きい, 他項目では良好と考える。

⑤hq, XE とともに NEUT, LYM, EOS は $r=0.892-0.909$ と良好であった。MONO: $r=0.615-0.697$, BASO: $r=0.495-0.541$ であり, カウント数や塗抹標本上の細胞分布誤差などがバラツキの要因として挙げられる。

【結語】本検討では概ね良好な結果が得られ XE との差異はほぼなかった。また, 種々の測定結果を判断する際には, 測定原理や試薬特性などを理解することが重要であると再認識した。

(代表 092-541-3231 内線 8709)